

昭和56年2月1日 第3種郵便物認可
平成22年3月1日発行（毎月一回一日発行）
俳句雑誌 沖 第41巻第3号



沖

俳句雑誌[おき]

3月号

沖 発行所

前座役

能村 研三

和菓子

俳句を作っている人は常に季節に敏感であるが、和菓子からも日本の四季の移り変わりが楽しめる。私は辛党なので、甘いものは弱いと思う。私がかつだが、茶道をやっている妻がお茶会に出た練切の菓子を持って帰ってくるので相伴にあずかることが多い。

お正月の花びら餅や、ひなまつりの桜餅、端午節句のかしわ餅など、私たち日本人には、行事の折に決まった和菓子を食べる習慣があり、夏には水ようかん、秋には栗の菓子など、和菓子によって季節を感じることもある。

このように和菓子に季節感があるのは茶道との関係が深く、日本の四季を敏感に取り入れ、季節にあったものを作ることが心得とされたからである。茶器や花とともに、和菓子の色や素材、形が季節を表現するようになった。

俳句の総合誌「俳壇」では、今年「甘味歳時記」「和菓子十」と題して、その季節のお菓子を紹介している。三月は「草餅」で、菓子職人かつ俳人の村田ひろじさんという方が書いておられる。

朧めく引込み線の名残り道

きさらぎや承知の上の前座役

灯さされて湖の輪郭春浅し

束ね髪の耕人見ゆる屋敷畑

「帰り鐘」 撞かぬならひや梅日和
真贋を見抜く手さばき春寒し

野遊びにしては無粋な男たち

切通し抜けて二月の空に会ふ

推敲の軌跡を辿る朧かな

師の本に「定本」「読本」かぎろへる

私の住んでいる市川は昔から文化人が多く住んでいることで知られているが、東京に負けない和菓子造りの職人が多いまちで、各和菓子屋さんのショーウィンドーに並ぶ繊切の色合いや形、そして何より菓子の名前の付け方が凝っているのが興味深い。

私の家に一番近い和菓子店の店主は、常に俳句歳時記を片手に、季語だけでなく、古今の俳句作品にイメージを喚起された創作菓子にも挑戦している。

能村 研三



蒼茫集

点々と

千田百里

蛾眉の月置いて冬至の果つるかな
卵割ればカラザ引き合ひ去年今年
灯明と父と踏台お元日
盛り塩のやうな富十見え大旦
日向ぼこ一人ぼつちの点々と
仁王立ちとは息継ぎの蓮根掘

ザイル仲間

久染康子

結氷湖ころがつてゆく餅かな
鱈酒や昔ザイルを組みし仲
密猟めく会話少なきぼたん鍋
腰強き竹箒選る十二月
門灯を火の番過ぎる迄灯す
大どんど上空に生る乱気流

終着点

藤原照子

冬たんぽぽ病まねば放つておかれけり
湧水を絶やさぬ眠り甲斐の山
雪山へ鳥の目となるロープウエー
冬麗や海へ突き出し工場群
生きてゐる証の布団干されけり
夕千鳥啼き流木の終着点

しのび音

北川英子

真闇より白立ち上る寒怒濤
師の生誕百年朴の冬芽満つ
外灯の限りを雪のしきりなり
ほのぼのと母乳の匂ふ冬座敷
煙噴く一山のほか深眠り
凍滝のしのび音縷々と日暮来る



能 笛 荒井千佐代

ポケットの深きがふたつ冬の鴟
戸籍課のペンに鎖やうそ寒し
大灘に音無し寒の落日も
凧やセロリはコップに立てておく
逝くは神に選ばれし人茨の実
能笛の一と吹きに冬深みけり

沖年輪 千田 敬

正論の風下にゐて寒薔薇
ふらり来て仲をとりもつ懐手
日向ぼこ仲違ひとは静かなり
水面鏡溶け初むわが顔拒むかに
熱爛や子規を身内のやう語り
沖年輪四十年目の年明くる

入母屋 望月晴美

入母屋は翼のかたち初御空
夫の墓東にありて初茜

神杉のしづり雪ゆゑ浴びもして
見頃ともみえず見ごろの冬ざくら
枯るるなかごとんとんと小海線
師の葬を八ヶ岳勉強会指書にて八ヶ岳にて悼む冬の虹
初 日 上谷昌憲

石ころはなべて初日に向きにけり
雀にはすずめの御慶ひとしきり
初雀ならばもそつと近う寄れ
ニホンゴを紡ぐ指先初メール
日本の裏や表や餅を焼く
ブレナーの絵の中へ散る冬薔薇
しづかな木 辻美奈子

冬の薔薇切ればしづかな木となりぬ
光年のふいに親しき寒の星
先生と呼べばなほ冬あたたかし
白菜を脱ぎ白菜の真白なる
凍蝶に日の当たりをる痛みかな
混沌のはじめに檉芽吹きそむ

なきうさぎ

広渡敬雄

月明の三角点に獸来る
なきうさぎ成層圏も晴れわたり
牛乳の膜の鮮し冬の雲
眠るため庫に入る車輛冬の星
ひとりごとのやうに消えたる鼬かな
春の鴨土手上がつてゐることも

隠れんぼ

菅谷たけし

初春「俳句文字館」や九十翁の軸掛けて
二〇一〇年新春詠に無き師の名
着ぶくれのポケ切符の隠れんぼ
眠るごと逝きしと聞ける実万両
太陽が背を温むる蓮根掘
どの家も柵挿して蚕の路地

投了

安居正浩

塀沿ひに並び出を待つ酢莖樽
煤逃げのつもりが妻も行くと言ふ
東京の街光らせて寒波くる
投了の敗者を抱く冬灯
参道に善男薄女そして害

生も死も天気と同じ日向ぼこ

かたことの

田所節子

煤逃や床屋に姿勢正されて
留守番として子の家に寒くをり
かたことの御慶へ折目正しけり
冬あたたか子守児母の仕草して
女正月折紙を児に習ひをり
冬日映え光の箱の立つ都心

大鷹

杉本光祥

年用意端の紛れしセロテープ
シュレッダー去年のしがらみこなごなに
選ばれし億の一の身初日受く
千里を往かむ六度目の年男
大鷹の空を統べをり芯となり
鷹匠を信じ切つたる拳の鷹

毛糸玉

宮内とし子

離されて突き離されて毛糸玉
初夢のただ真つ白のめでたさよ
年玉に一冊添へる偉人伝
再会の叶はぬ人の賀状かな

霜の花土堀くづるる農具小屋
ストーブ列車囲めば誰も親しくて

師の一語

遠藤真砂明

餅搗くや海の朝日に杵をあげ
出刃を研ぐ大鮫鱈の吊しどき
海鳴りにふつと日暮の風邪心地
錨泊の闇が高鳴る除夜汽笛
すこし力んでみどり子の初通じ
師の一語燃ゆる初日へ合掌す

霜 夜

成宮紀代子

定かでない母の余命を聞く霜夜
小晦日酸素マスクの母見つむ
初日浴びインコは水の玉弾く
お鷹場の池に三日の鴨睦む
火事跡の露な間取り見て通る
酸素マスクの母葛湯のやうな眠り

熱 爛

鈴木良 戈

熱爛を翔先生と耕二かな

湯気淡く七草粥の良き艶に
ラガー飛ぶ夕べの影を濃く引きて
海に向くなぞへに群るる福寿草
食積に淡く残りし母の色

丹 田

大畑 善昭

一心に降る雪湖心消すために
勤行を終へて日の出の氷柱かな
雪を掻くまだ丹田に力あり
洩や校了の朱のペンを閉ぢ
家ありて路あり雪が首の丈
木々の瑞わが誕生の二月来る

樂しからずや

中尾 杏子

襖絵の鷹が窺ふ隙間風
世の隅も樂しからずや毛糸帽
一病を秘しゐて叩く初なづな
オリオンの楯きらめけり産声に
寒満月毬とつきませうつた姫
鎖樋雪解あかりの珠つらね

潮鳴集

追伸 高橋ちよ

追伸のやうな雲ゆく年の暮
遠出には老いすぎ庭の梅探る
冬銀河本気で生きて仮の世や
日脚伸ぶと眩きながら手を洗ふ
夫見舞ふために覗きし初鏡

新塔 齊藤 實

押しくらは饅頭新塔どんと高くなる
レンブラントのやうな灯影の聖夜なり
紛争の火種途絶えよ火消し壺
初雪の積れよ積れ子が眠る
新塔を見上ぐる年を迎へをり

冬林檎 篠藤千佳子

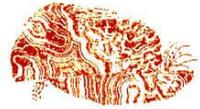
冬林檎ひとつ灯してひとりなる
白鳥のこゑつぎつぎと飛来せり
てのひらに地球をのせてレノンの忌
冬の朝人の背中を見て歩む
髪梳いて冬満月の重さかな

個人タクシー 高木 嘉久

焼芋屋に徐行の起点ありにけり
凍土や金管で吹く追悼歌
鳥散らし大きくなりぬ枯けやき
江ノ電の速度が捉ふ冬木の芽
冬銀河個人タクシー車庫を出づ



沖作品



能村研三選

山形

佐々木 昭

長崎

岩永 充三

東京

能美昌二郎

それぞれがピカソの弟子らし福笑
六歌仙のがさぬ構へ歌留多会
喝采を宙に集めし梯子のり
民話の会出番窺ふ雪女
簀に浮かぶ寒の日差しを漉き込めり
年毎に目深に被る冬帽子
大きくさめして結論をくつがえす
耳鳴りは星のささやき冴ゆるかな
このことは云はずにおかう牡丹焚く
一つ成し一つ忘るる年用意
自己主張なき冬瓜のごろりかな
大根の白健やかに干されけり
地下鉄の下の下まで冬めきぬ
献饌の塩の白さや神の留守
内助の功甚く勤労感謝の日

師の逝きて山茶花に雨降りやまず
地の神の息吹にひかれ冬の蝶
葉を脱ぎて冬芽にきほひ生れけり
風の道素直に葎の枯伏せる
草の絮地に触れてまた蒼穹へ
梟や大樹の虚に声宿し
綿虫の遠のく色に利根夕べ
野球帽離せぬ親子一の寅
登四郎あり翔あり沖の冬銀河
鶴翼の雄松が枝に初日さす
老いて知るこの贅沢な日向ぼこ
吹き晴れて荒磯に迫る野水仙
標の大き足跡獣めく
裸婦像のくびれに残る蔦落葉
頬被りして仙人のかほとなる

市川市

板橋 昭子

和田 満水

荒原 節子

沖作品 15句選評

*
能村研三

民話の会出番窺ふ雪女 佐々木 昭

柳田国男の遠野物語が上梓されて以来、東北地方民話は人々から注目されるようになった。中でも雪深い東北では「雪女」伝説が今に語り継がれている。話のあらすじは「突然現れる美しい気だての良い嫁」というところが共通しているが、毎年のように雪や冷害に苦しめられ、いつときでも貧しい生活を忘れるために、現実には起こり得ない夢が叶えられたら、という思いが背景にあるようだ。独特の方言を取り入れた節まわしで語られる民話の語りの会、いよいよその話も佳境に入ってきて、何か本当に「雪女」が出番を窺っているようなシチュエーションとなってきた。

年毎に目深に被る冬帽子 岩永 充三

冬帽子とは毛糸で編んだものや耳当てのついた防寒用の帽子。年毎に頭頂がとみに薄くなってくると、今まで帽子を被っ

たことのない人までが愛好家となる。どうせ被るなら、やはりお洒落に、少しでも若々しく見えるように工夫する。目深に被ることで、やや視野が遮られるが、人生の歳月を背負ったかのようにニヒルな自分が演出できる。

自己主張なき冬瓜のごろりかな 能美昌二郎

「冬瓜」は秋に熟すので季語は秋。冬期までよく品質を保つことからこの名がついたそうだ。南瓜や西瓜とは違い、もつと大きく、ずんぐりむっくりしていて、のつぺらぼうで頼りない感じがする。味の方も頼りない感じで、全体的にヌーボーとしていて無表情である。作者は、そんなイメージを自己主張が無いと捉えた。

地の神の息吹にひかれ冬の蝶 板橋 昭子

真冬でも、風のない暖かい日には、越冬中の蝶が、温まった石垣や木材などの上で翅を休めている光景に出合う。触角を動かすだけの動きだがしずかな命が息づいている。自然の偉大さには驚くものがあるが、こうした自然の背景には地の神なるものが出て、その息吹に操られるように冬蝶が存在していると考えられるも頷ける。

梟や大樹の虚に声宿し 和田 満水

梟は社寺林や屋敷林をすみかとし、畑などで狩をする里山の鳥。大木の樹の洞などに営巣し、夜行性で、ネズミなどの小動物や小鳥を餌にする。ただ最近では梟が繁殖できる環境が悪化しているといわれている。梟が生息するには樹の洞の環境があることがあげられるが、この樹の洞も、日本全国で減ってきている。樹の洞のできる大径木を育てていくなど、森の育成と、より多様な生物が棲息できる環境づくりが求められている。梟も大樹の洞という安住の地を得て、安心して鳴き声を発することが出来た。